

平成30年度 一般入学試験問題

# 国語

## 注意事項

- 1 問題は1ページから15ページまであります。
- 2 試験時間は50分です。
- 3 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開いてはいけません。
- 4 試験開始後、この問題冊子のページ不足・印刷の不鮮明などの不備に気づいた場合は、監督者に申し出てください。
- 5 解答はすべて解答用紙に記入してください。  
※字数制限のあるもので、句読点などが必要な場合は、すべて字数に含みます。
- 6 解答用紙には、志望コース・クラス、出身中学校名、受験番号、氏名を必ず記入してください。

自由ヶ丘高等学校

—  
次の文章を読んで、後の各問に答えよ。

人間は、もちろん、物質的な、ある基本がみだされていなければ、飢えや凍えのもとでは、豊かだとはいえない。

しかし、豊富とか豊饒ほうじょうという言葉は、生態学者が言うように、もともと生物にとつて、地球的な豊かさ、つまり、なるべく多くの種が共存していること、を意味していた。多くの種が共存しているほど、それぞれの個体もまた、豊かな生き方を保障されているのが、大自然の原理原則だからである。人間の個性を大切に、とか、弱者もともに生きる、ということは、人間もまた自然の一部である限り、地球的な豊かさからみれば当然のことなのである。

木の葉が落ちてバクテリアに分解され、土壌を豊かにするように、小鳥が木の実を食べたり、土中に蓄えたりすることによって、結果的に植林しているように、多くの種は、依存しあいながら生きている。《1》人間もまた、相互に依存しあい、連帯しあいながら、社会の中に根を下ろし、労働や対人関係や自然との交流の中から、養分を吸収し、自分自身も社会にいくばくかものものを還元して、植物のように生の循環をくり返す。その循環の環は、いくつもの他者の循環の環とからみ合い連帯しあうことによって、豊かなのである。

企業の歯車のひとつになりきって、全人生を会社に捧げたり、家に帰りついたら、寝るだけでは、自分自身の全体としての人生はない。カネというひとつの価値だけに支配されることも豊かではない。

もともと、生きる、とは生命力の全体的な発揮であり、偏った部分的な人生は豊かな人生とはいえないのである。私たちは食物、暖かさ、眠り、愛し愛されること、社会からはじき出されないこと、教育、信念、文化的活動、政治参加などのすべてに対する欲求を持つ者として、全体として生きるのである。それが自己実現である。

また私たちは、雄大な山を見たり、森の中を歩いたり、太陽の輝きが雨上りの樹々にきらめくのを見たりしたとき、また、一本の草や花、風のそよぎ、水の音、虫や鳥に出会ったときにも、心をひかれ、美しさや感動を覚えて立ちどまることがある。自然の中にいると、何ともいえない気持ちになり、永遠の自然や、命のふしぎさに、神秘的な何かをかんじたりもする。人生の挫折の中で、自然にふれて立ち直るきっかけをつかんじたりするのも、人間そのものが自然的存在であるからだろう。

私たちは、近代文明にまきこまれないで自然を友として生きている民族に豊かさせんぼうと羨望をかんじたりもする。《2》

比喩的な表現であるが、人間は、外の自然と共通で、外の自然と交流しあう、情緒的で、感覚的な、あるいは食欲や性欲という生命力の表現をはじめとする身体的な、いわゆる「第一の自然」とよばれるものと、科学、技術、生産などにかかわる「第二

の自然」とよばれる二つの自然を持っており、その交錯、調和、統一によって生きている。

だから、人間が、自分を全体として生きることは、第一の自然と、第二の自然を統一して、他者との共存の中で生きることの意味しており、それが豊かさ感、という充実した幸せ感をもたらすのだと考えられる。経済価値にのみつつ走ることは、人間の二つの自然の調和にそぐわないことではないだろうか。

日本には、アメニテイという言葉の正確な訳語がないといわれるが、アメニテイとは、あるべきところに、あるべきものがある、ということだという。≪3≫つまり、それは、第一の自然と第二の自然が、統一され、敵対的でなく、共存をひろげていくことを意味する言葉であろう。そして日本では、技術や生産力の価値があまりに支配的になってしまっているため、「あるべきもの」も「あるべきところ」も、わからなくなっているであろう。

二つの自然の統一、調和というとき、注意しておかなければならないことがある。科学とか、技術とか、生産などの、いわゆる第二の自然にかかわる言語表現は、数字や法則を含めて、多様で正確な表現形式を持っていると思われる。金銭については最も簡明である。ところが、あの山はずばらしい、とか、この絵や音楽はいい、という感覚的な、第一の自然にかんしては、私たちは、ほとんど数字や法則のような客観的な表現を持っていない。≪4≫「悲しい」という一言の背後には、おそらくいろいろなものがあるのだが、悲しみが深くなればなるほど、それは「悲しい」としか言いようがなく、人びとは、それを、体験的に悟るか、あるいは感覚的身体的なものによって、相互に了解しあうことができるにすぎない。

感覚や感情を正確に客観的に表現するのが難しいだけでなく、人間には無意識の領域さえあるのだという。私がここで問題にしたいのは、人間というものは（あるいは自然というものは）、まだ知られていない多くのものを持っている未知の存在で、ただモノとカネがあれば幸せだ、ときめつけられるほど単純なものではない、ということである。つまり、豊かな社会の実現は、モノの方から決められるのではなく、人間の方から決められなければならないということである。

客観的な表現はできないけれども、この第一の自然、感覚や感情や身体という、私たちの生を支えているものにも正当な座席を与えなければ、本当の豊かさ感<sup>1</sup>は得られないのではないだろうか。

ここで誤解をさけるために言えば、この感覚の世界は一人一人に完全に個別的なものではない。また、捉えにくいもの、証明できないものは、存在しない、ということでもない。≪5≫むしろ、あまりにも自明なことのために、ことさらに説明する必要がないのだと思われる。

だからこそ、カネや、政治家の演説ではごまかされないものとして、この人間の、共通の感受性の世界がある。この世界にも

豊かさ感を感じさせるような技術、生産、社会のありかたこそが、本当の豊かさではないだろうか。それは地球的な豊かさと共通する豊かさである。そしてその豊かさは、体験の中でしか感じ表現することができないからこそ、人間は、豊かな全人間的体験を体験できるような余暇——つまり自由時間を必要とする。

(てるおか 暉峻 いっこ 淑子 『豊かさとは何か』より)

問一 本文中からは次の一文が抜けている。本文に入れるにはどこが最も適当か。本文中の《1》《5》のうちから一つ選び、番号で答えよ。

それは、私たちの中にある自然と、外界の自然が、お互いに交流し、呼び合うからだろう。

問二 本文中の 当然のこと について、筆者が当然だと考えていることは何か。最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 豊富や豊饒などの言葉が、生物にとって必要不可欠な、多くの種が共存している状態を意味しているということ。
- 2 飢えや寒さを感じないですむような生活ができていなければ、人間の生活は決して豊かとはいえないということ。
- 3 豊かな生き方を保障するため、人間も他者の個性を尊重したり、弱者を切り捨てずに共存したりということ。
- 4 多くの種が共存するほどより良い生き方が可能になることは、豊饒という言葉の意味からも明らかだということ。
- 5 他の動植物と同じように、人間もお互いに依存して連帯し合いながら、社会の中に根を下ろしているということ。

問三 本文中の 自己実現 について、筆者が考える自己実現とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 社会に自分を受け入れてもらうために、不平不満を口にせず休みなく仕事に励んで成果を挙げていくこと。
- 2 愛する妻や子どもを守っていくために、自分のやりたいことも我慢して日々働き、家族から感謝されること。
- 3 他者からの反感を買ってでも、自分の心の奥底にある欲求に忠実になって、やりたいように生きていくこと。
- 4 仕事ばかりに自分の人生を費やすのではなく、生理的、社会的な様々な欲求を満たしながら生きていくこと。
- 5 自分の子どもに自分の果たせなかった夢を果たしてもらうために、時間をかけて一生懸命に教育を行うこと。

問四 本文中の「人間の二つの自然の調和」について、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 感覚的な身体の領域である第一の自然と、論理的な思考の領域である第二の自然を統一すること。
- 2 原始的な本能の領域である第一の自然と、直感的な科学の領域である第二の自然を統一すること。
- 3 神秘的な精神の領域である第一の自然と、現実的な物質の領域である第二の自然を統一すること。
- 4 全体的な感覚の領域である第一の自然と、体験的な知恵の領域である第二の自然を統一すること。
- 5 根源的な恐怖の領域である第一の自然と、文明的な安心の領域である第二の自然を統一すること。

問五 本文中の「あるべきもの」も「あるべきところ」も、わからなくなっている。について、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 科学や技術などが極度に重視されるようになった結果、感覚的なものの経済価値がわからなくなっているということ。
- 2 他と異なる文化を築き上げてきた日本人は、アメニテイという言葉の正しい意味がわからなくなっているということ。
- 3 技術ばかりが支配的な生活に慣れてしまい、感覚的なものを正確に表現する方法がわからなくなっているということ。
- 4 第一の自然と第二の自然が互いに主張し合って譲らないため、両者の望ましい姿がわからなくなっているということ。
- 5 科学や技術ばかりが価値を見いだされるようになって、感覚や感情などの重要性がわからなくなっているということ。

問六 本文中の「悲しい」としか言いようがなく、について、それはなぜか。理由として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 「悲しい」という言葉は多くの意味を内包していて、人間の様々な感情も表現することができる便利な言葉だから。
- 2 感覚的な領域を多く含む第一の自然に関するものに対しては、数字や法則などの客観的な表現は望ましくないから。
- 3 「悲しい」という言葉も背後にある感情を完全に表現できてはいないが、それ以上に適切な言葉も存在しないから。
- 4 客観的な言葉では表現することが難しい無意識の領域でも、「悲しい」という言葉なら表現することができるから。
- 5 感情の言葉である「悲しい」という言葉は、数字や法則とは違って人間同士が相互に了解しあうことができるから。

問七 本文中の **本当の豊かさ** について、筆者が考える本当に豊かな社会とはどのような社会か。その説明として最も適切なものを、次の1〜5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 人々が第一の自然を大切にして、どうしても必要な最低限の科学以外は捨て去り自然と共生するような社会。
- 2 感覚や感情などに正当な地位が与えられ、人々が無意識のうちに互いに依存しながら連帯し合うような社会。
- 3 飢えや凍えから身を守って暮らすために、人々が相互に協力し合いながら技術を発展させていくような社会。
- 4 人々が他者との交流や様々な体験などを通して、感覚や感情などの世界にも豊かさを感じられるような社会。
- 5 人々が近代文明から距離を取り、太陽の輝きや自然の美しさなどに日々感動しながら生きていくような社会。

問八 本文中の **地球的な豊かさ** について、その内容として最も適切な言葉を、本文中から十七字で抜き出し、はじめと終わりの三字で答えよ。

問九 本文の内容と一致するものとして、最も適切なものを、次の1〜5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 人間も自然の中で生きる生き物であるので、労働や生産といった行為は自然を豊かにするために行われるべきである。
- 2 情緒的、感覚的な側面として内なる自然を持つ人間は、自然に癒やされたり、畏敬いけいの念を抱いたりする生き物である。
- 3 絵や音楽などの芸術は、本来第一の自然に属するものであるため、数値化して値段をつけられるようなものではない。
- 4 同じ体験をする人はこの世に二人と存在せず、言葉で伝えることも不可能なため、感覚の世界は個別的なものである。
- 5 豊かな生き方をするためには、自分を支配している社会の束縛から全て解放されて、自由にならなければならない。

## 二

次の各問に答えよ。

問一 次の傍線部の漢字の読みを、平仮名で書け。

昨日、軒下にうっそうと繁茂していた雑草を刈った。

問二 次の傍線部に適当な漢字をあて、楷書で書け。

雑誌のかんとう特集に、カラー写真で十ページもさいた。

中学生の頃、私の一番の仲良しは、いつも困ったようにとんがった口をするチョボちゃんという子であった。次の文章は、そんなチョボちゃんとの思い出を私が綴ったものである。これを読んで、後の各問に答えよ。

二年生も残り少ないある午後、クラスでも一番発言力のあるキクコに言われた。

「ちよつと明日からは私たちと登校しない？チョボなんていいじゃない。ほつとけば。八時十五分前に駅だからね」

突然のことで、私は何も考えずとりあえず、つい「あ、うん」と答えたきりだった。別にチョボちゃんに意地悪をする気なんに本当にぜんぜんなかった。

ただ、そのときはみんなが慕っている――または恐れているキクコにこの自分が誘われたことに驚き、何故かはわからないけど、その瞬間<sup>1</sup>まるで自分が偉くなったような、そんな錯覚がした。□とまではいかなければ、どこかでちよつと自分が威張っているのはうすうす感じていたから。

翌日の朝、チョボちゃんと待ち合わせず、そのままキクコたちと登校した。教室で顔を合わせると寂しさの混じった困惑した顔をちらつと見ただけで、チョボちゃんは何も言わなかった。お昼もそのままの流れで「当然のごとく」、私はキクコやその登校仲間に呼ばれて一緒に食べた。

どうしようか、と気になって探すと、チョボちゃんは教室の隅で一人で食べていた。下を向いて、口を少しとがらせながら。私が見ているのは知っていただろうけど、決して私と目を合わせないようにしているようだった。

そのうち、授業でも休み時間でもひたすら何も言わず、たまに目が合っても恐れるかのように目をそらすチョボちゃんに、だんだんイライラしはじめた。本当はどうしていいか、ただ、わからなかった。私にどうしてほしいのだろう。時間が経てば経つほど、自分がどこにいるのか、何をしようとしているのかがわからなくなっていた。

決してキクコたちといることが楽しかったわけじゃない。チョボちゃんという時間のほうがいつもの自分でいられて楽しかったし、楽しかった。でも、どうやって元にもどっていいのか、私にはさっぱりわからなかった。わからないと余計にイライラして、それで私は考えるのをとりあえずやめた。キクコたちと笑っていても、大げさなほど自分が笑っているのに、笑えば笑うほど、本当はつまらなくて哀しいような感覚だけが時間とともに積もっていった。降りやまずに、しんしんと積もる真冬の雪<sup>3</sup>みたい。本当は自分に怒っているのに、私はそのことに気づかないふりをした。そのかわり、ひたすらチョボちゃんに怒っているのだと思いきもうとしていたのだと思う。今だったら簡単にわかることが、そのときの私にはどうしても見えなかった。

一度だけ、チョボちゃんがお昼休みに私のところへきた。

「あの、レナ……」

そう言いかけたチョボちゃんをわざとさえぎるように、キクコが割って入ってきた。

「レナ、ちよつと一緒にB組に行こうよ。はやく、はやく」

一瞬、どうしようかと迷い、チョボちゃんに目をやった。その瞬間、またチョボちゃんは下を向いてしまった。言いかけた続きを話すような気配もなく、うじうじとしているチョボちゃんがとても情けなく見えた。そうしたら、そんなチョボちゃんに対して急にわけもなく嫌気がさした。

結局、何も言わないチョボちゃんを前に、そのまま私はキクコについて走ってB組に行った。

私が走っていってしまうのがわかっていても、チョボちゃんは何も言わなかった。キクコについて教室を出るときに一瞬振り返ると、チョボちゃんはじつと立ったまま自分の足元だけを見ていた。まるでそこに何かの答えが落ちていて、それを探しているかのように。

三週間ばかり、そんなから騒ぎで、どこかうつろな日が続いた。

自分が派手に笑ったり、楽しげにふざけたりすればするほど、自分の中身がぼろぼろといろんな穴から抜け落ちて、空っぽになつてゆくようだった。

ある朝、キクコたちと登校すると、ホームルームで担任の先生が言った。

「大変残念ですが、大谷静香さんは転校することになりました。急な話でしたが、ご家族のご都合で、本人もみんなに挨拶できないままのお別れに大変胸を痛めているようです。なお、連絡先は黒板に書きますので……」

先生の声が耳鳴りのように頭の奥で、重なりながら響いてきました。

チョボちゃんが転校。

クラスの反対側の席でキクコたちが数人で、ぼそぼそと何か話していた。そのうちの一人がくすつと笑った。耳障りな、何とも嫌らしい、汚い笑い方だった。笑ったのはいつも登校するグループの、目の細い子だ。その子がこの頃自分が仲間として接しているグループの一人だと思つくと、胃のあたりがよじれたように気持ちが悪くなった。

学校から帰つて、あわててチョボちゃんの家で電話した。

電話に出たのは彼女のお母さんで、本人はそこにいなかった。

「せっかくお電話いただいたのに、ごめんなさいね。なんだかね、訳を話してくれないからわからないのだけど、本人が学校の子とは誰とも話したくないって言うのよ。ええ。そうよ。もちろん、転校は本人の希望もあるのだけど。ずっと前からエスカレーター式の学校へ、っていう話が、ほら、あったのよ、うちで。ええ。そう、主人の母校の。本人が今なら転校してもいいって突然、言うものだから。主人とも話したけど、何かあったのかしら？ レナちゃんなんかにいつもよくしていただいているのね……本当にごめんなさいね。静香はね、もう先におばあちゃんの家に行っちゃってるのよ。新しい街にも、新しい学校にもはやく慣れたいからって。気が早いというか、なんていうんだか、あの子はもう」

受話器を握り締める右手が少し震えた。泣きだしそうな自分を堪えながら言った。  
「チョボちゃんにお手紙だけ渡してください、あの、今夜もって行きますから」

そのあと、自分の部屋で手紙を書いた。書き出すと便箋やシャーペンを持つ右手がにじんできた。  
いやだ、いやだ、いやだ。

—どうしようもなく自分が嫌で、なによりも怖かった。

支離滅裂に書き綴った手紙は枚数ばかりが増えていった。シャープペンを強く握るせいで、すぐに右手の中指が赤くなった。親指の付け根に、重いようなだるいような鈍い痛みが出てきたけど、私はそれを無視して書き続けた。

どんなに自分がバカだったかということ。自分のとった軽薄そのものとしか言いようのない行動で、チョボちゃんをどんなに傷つけたのか、やっと今になってわかったこと、そしてどうか許してほしいこと、チョボちゃんの大切さが本当にわかったこと。ごめんね、ごめんね、と手紙を通して、何回も書いた。まるで自分が自分じゃないみたいだった。この数週間を振り返るとどの場面でも、その中の自分がおぞましく怖かった。

結局、手紙に返事がくることはなかった。

チョボちゃんが転校して、私はもうキクコたちと登校することをやめた。そのうち、グループに入っていないこと、一人でいることも少しずつ怖くなくなっていく。

(小澤 征良 『蒼いみち』より)

問一 本文中の波線部1～5の中で、熟語の構成として他と違うものを一つ選び、番号で答えよ。

問二 本文中の  に当てはまる熟語として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 有頂天    2 一本気    3 無邪気    4 無頓着    5 真面目

問三 本文中の  決して私と目を合わせないようにしているようだった。 について、ここでのチョボちゃん的心情の説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 私の裏切りに対する怒りや疎外感はあるが、私に関わることでこれ以上迷惑をかけたくないと配慮している。
- 2 一人で行動をしなければならなくなった心細さに加え、こうした状態を招いた自分をふがいなく感じている。
- 3 人との関わりを避けたいという臆病な性格ではあったが、突然自分を裏切った私に対して怒りを覚えている。
- 4 苦手なグループに対する強い恐怖心はあるものの、そのグループにもてはやされる私に嫉妬心を抱いている。
- 5 孤立感からくる心細さとともに、私の態度の変化に不安を抱いてどう接してよいかわからずに戸惑っている。

問四 本文中の  私は考えるのをとりあえずやめた。 について、それはなぜか。理由として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 チョボちゃんの態度に苛立ちを感じている一方、キクコにもつまらなさを感じて一人であるほうが楽だと判断したから。
- 2 チョボちゃんへの不満や予想していなかった現況などに苛立ち、その対応を考えることに耐えられなくなったから。
- 3 チョボちゃんよりもキクコという方が楽しいと感じ、チョボちゃんへの不満がますます大きくなりそうだったから。
- 4 自らが望んでキクコといるわけではないのに、それを裏切りと捉えたチョボちゃんの態度が理不尽だと思ったから。
- 5 チョボちゃんの態度でキクコたちの意地悪に気づき、自分もその一員であることに穏やかでいられなくなったから。

問五 本文中の  どこかうつるな日が続いた。 について、その内容を表したものととして最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 ささいな誤解からチョボちゃんを傷つけ、転校に追い込んでしまうのではないかと不安を持っていたということ。
- 2 自分がチョボちゃんを傷つけたとわかったが、キクコと過ごすことでその罪の意識を忘れようとしていたということ。
- 3 強い自分を見せようとチョボちゃんを避け、さらに自分の心を偽ってまでキクコに気に入られようとしたということ。
- 4 自らの罪悪感をチョボちゃんへの嫌悪に転嫁しても心が満たされず、キクコとの時間にも空しさを感じたということ。
- 5 チョボちゃんとの仲直りを考えながらも、キクコにも嫌われては困るので、楽しくない時間も受け入れたということ。

問六 本文中の 胃のあたりがよじれたように気持ちが悪くなった について、その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 キクコたちが自分には聞こえないように話をしているのを見て、言いようのない疎外感を感じて寂しく思った。
- 2 チョボちゃんの行動に対する不信感と同時に、自分も心ないグループの一人にすぎないという違和感も感じた。
- 3 周囲の状況を考えないであからさまに態度に出す者の愚かさや、それを注意さえしない教師へ苛立ちを覚えた。
- 4 人をばかにしたような態度に対して心の痛みを感じ、自分のいるグループの非情さにやっと気づいて憤慨した。
- 5 思いやりの欠如した者への不快感をおぼえて、客観的には自分もまたその一員であることへの嫌悪感を持った。

問七 本文中の いただいた と敬語の種類が同じものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 お客様がいらっしやった。
- 2 こちらがその商品でございます。
- 3 まずはお茶を召し上がれ。
- 4 素晴らしい作品を拝見した。
- 5 これは先生がくださった本です。

問八 本文中の 受話器を握り締める右手が少し震えた について、それはなぜか。理由として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 罪の意識を痛切に感じながらも、もうチョボちゃんに会って謝罪ができそうもない現実に迫られ、同時に転校の原因を一切語らずに去っていく友に申し訳ないと思ったから。
- 2 チョボちゃんの転校した理由がわかっていながらもかわからず、あえてそれに触れようとせず丁寧に敬礼を述べたお母さんがかわいそうに思え、いたたまれなくなったから。
- 3 転校というチョボちゃんの決断の早さに驚くとともに、親友である自分に相談がなかったことが残念であり、思わず怒りにも似た感情が次第にわき上がってきたから。
- 4 誰にも見送られずに去ったチョボちゃんへの惜別の気持ちがわき上がると同時に、悲しみを押し殺して転校の理由を語らなかつたチョボちゃんの我慢強さに感心したから。
- 5 チョボちゃんのお母さんの言葉から自分の犯した過ちに初めて気づき、自責の念からすぐにでもチョボちゃん本人に謝罪をしなくては申し訳ないと思ったから。

問九 本文中の「私はそれを無視して書き続けた」について、手紙を書く「私」の心情と様子の説明として最も適当なものを、次の1〜5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 自分の居場所を見つけようと親友をおとしいれておきながら、一方ではそうした心の醜い自分のことも嫌ってひとしきり泣いた後で、冷静に気持ちを落ち着かせながら、チヨボちゃんに謝罪の気持ちが伝わるように書き続けた。
- 2 自分と似た性格のキクコを受け入れて、チヨボちゃんを転校に追い込んでしまった自分の無神経さを嫌い、指の痛みも忘れるほど手に入力することで自らの誠意を表して、チヨボちゃんに何とか許してもらおうと書き続けた。
- 3 チヨボちゃんへの様々な思いを抑えられなくなるとともに、周囲に流されチヨボちゃんが傷つくことも考えずに振る舞っていた浅はかな自分を嫌って、目に涙を浮かべながらもその時のありのままの気持ちを懸命に書き続けた。
- 4 気弱な自分の性格と優柔不断な態度によってチヨボちゃんという本当の友人を失ってしまったことを強く後悔して、頭の中が混乱して上手く書けそうもなかったが、謝罪のあかしは手紙の枚数にあると信じて必死に書き続けた。
- 5 配慮に欠けた態度がチヨボちゃんを苦しめたのだから、きつと恨まれているにちがいないと恐れながらも、相手に謝罪の気持ちを伝えるために、手紙の返事が来ないことは承知のうえで堪えていた涙をこぼしながら書き続けた。

#### 四

次の文章を読んで、後の各問に答えよ。

今は昔、持統天皇と申す女帝の御代に、中納言大神高市麿といふ人ありけり。もとより性心うるはしくして、おのおのに智りありけり。また文を学して、諸道に明らかなりけり。しかれば、天皇この人をもつて世の政を任せ給へり。これによりて高市麿、国を治め、民を哀れぶ。

しかる間、天皇もろもろの司に勅して、狩りに遊ばむために、伊勢の国に行幸あらむとして、「速やかにそのまうけを営むべし」と下さる。しかるに、その時三月のころほひなり。高市麿、奏していはく、「このごろ農業のころほひなり。かの国に御行あらば、必ず民の煩ひ無きにあらず。しかれば、御行あるべからず」と。天皇、高市麿のことに随ひ給はずして、なほ、「御行あるべし」と下さる。しかれども、高市麿、なほ重ねて奏していはく、「なほこの御行やめ給ふべし。今農業の盛りなり。田夫の愁へ多かるべし」と。これによりて遂に御行やみぬ。しかれば、民喜ぶこと限りなし。

あるときには天下早魃せるに、この高市麿、我が田の口を塞ぎて水入れずして、百姓の田に水を入れしむ。水を人に施せるによりて、すでに我が田焼けぬ。かやうに我が身を棄てて民を哀れぶところあり。これによりて、天神感を垂れ、竜神雨を降らす。ただし、高市麿の田のみに雨降りて、余りの人の田には降らず。これひとへに、実の心を至せれば、天これを感じて守り加ふるゆゑなり。

しかれば、人は心うるはしかるべし。永く横様の心をつかふべからず。

(『今昔物語集』より)

※ おのおのに智りありけり……あらゆる方面に聡明そうめいであった。 ※ 文を学して……漢詩文を学び。

※ 行幸……天皇のおでまし。後出の「御行」も同じ。 ※ 奏して……帝みかどに申し上げて。

※ 天神感を垂れ……天の神様が感心なさって。

問一 本文中の まうけ を現代仮名遣いに改めて平仮名で答えよ。

問二 本文中の 三月 は異名で「やよい」と読むが、「二月」は異名で何と読むのが適当か。平仮名で書け。

問三 本文中の 心うるはしくして は「正直な心の持ち主で」という意味だが、これと反対の心のありようを示す部分を、本文中から抜き出せ。

問四 本文中の 必ず民の煩ひ無きにあらず の意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 民に嫌われないはずはないでしょう。 2 民に煩わされるはずです。

3 民の煩いなどあるはずがないでしょう。 4 民の煩いがあるはずです。

5 民の煩いがないころに獲物はいないでしょう。

問五 本文中の こと について、これはどんな内容をさすか。最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 三月は農業の繁忙期です。 2 狩りに最適の時期ではありません。

3 伊勢の国に行くべきではありません。 4 伊勢の国には天皇が行く場所はありません。

5 伊勢の国の住人が悲しんでいます。

問六 本文中の 民喜ぶこと限りなし について、それはなぜか。理由として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 天皇の行幸が終わり、農業に専念できるようになったから。

2 農業が忙しいときに、他のことに煩わされることがなくなったから。

3 繁忙期とはいえ、自分の地域への天皇の行幸がなかったから。

4 干ばつで苦しんでいたが、自分の田に水を引き入れることができたから。

5 天皇の処分をおそれていたが、高市鷹がとりなしてくれたから。

問七 本文中の「天これを感じて」について、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 高市麿の思いを理解し、高市麿だけでも救おうとした竜神の情けに天の神様が感動したということ。
- 2 高市麿だけを救い、その他の人々は見捨ててしまう竜神の一徹さに天の神様が感動したということ。
- 3 危機に直面しても動揺せず、落ち着いて解決していく高市麿の聡明さに天の神様が感心したということ。
- 4 結果的に自分の田にだけ雨を降らせるようにしむけた高市麿の知恵に天の神様が感心したということ。
- 5 わが身を犠牲にして民を救おうとする高市麿の思いやりある行いに天の神様が感心したということ。

問八 この文章について説明したものとして最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 高市麿に関する同じ趣旨の二つの逸話を紹介することで、民を思う高市麿の誠実な態度を浮き彫りにしている。
- 2 高市麿に関する同じ出来事を別の視点から考察した二つの逸話から、高市麿の非凡さを明らかにしている。
- 3 高市麿に関する別の出来事を同様の視点から比較した二つの逸話から、政治にかける高市麿の熱意を表現している。
- 4 高市麿に関する対照的な二つの逸話を比較することで、高市麿の二面性を明らかにしようとしている。
- 5 高市麿に関する類似した二つの逸話を並べることで、権力者の身勝手さと力の強さを際立たせている。

